報　（第三種郵便物認可）

八つ縄文織り講師 考案者から生徒に

諏理大の講義

ものづくりの精神伝える

諏訪地方の手織りの歴史などを学ぶ集中講義で八ケ岳総合博物館を訪れ、機織りを体験した公立諏訪東京理科大の学生㊨

江戸時代の諏訪地方で発展した手織りの歴史や同技法を基に表計算ソフトを用いて柄の表現力を高めた「八つ縄文織り」に関する公立諏訪東京理科大学（茅野市）の講義の講師が今年度、考案者の高木義一朗さん(75)＝諏訪市＝から高木さんの生徒の北原ますみさん＝富士見町＝に引き継がれた。明治時代に岡谷市を中心に大きく発展した製糸業よりも前に、諏訪地方で盛んだった繊維業とものづくりの精神を学生たちに伝えている。（野村知秀）

北原さんは高木さんの下で「八つ縄文織り」を学び今年で12年目。同大で行う集中講義「文化と芸術A」は数年前から高木さんが講師を務めてきたが、年齢などのため元小中学校教員の北原さんに講座を託した。

今年度前期日程で同講義を受講した学生は15人。昼前から夕方まで続く集中的な講義で、今月1日に始まり、15日に最終回を迎えた。

15日は大学近くにある市八ケ岳総合博物館で機織りや手織りの歴史、諏訪地域で発展した織りの技法などについて理解を深めた。機織りを体験した学生もおり、同館職員のアドバイスを受け体験した後藤景斗さん(20)は「時代とともに機織りの技術革新の過程を知ることができた。織り機の作業スペースの狭さから当時の日本人女性の体格も感じられた」と話した。

北原さんは「高木さんが取り組まれてきたことを学生さんたちに伝える役を担うことになったが、私一人ではできない。高木さんの下で学んでいる皆さんの力を借りながら、諏訪のものづくりの変遷を知る上でも大事になる江戸時代の手織りについてしっかり伝えていきたい」と意気込んでいた。